

文学部生の

リアルな！学生生活

Vol.132

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。



ライフセービングに打ち込む

「学外活動応援奨学金」。これは、中央大学文学部における独自の奨学金制度です。大学1年の最後の講義で、担任の松田教授から奨学金についての説明を聞き、「やるしかない」と確信しました。それもそのはず、私にとつての大学生活は学外活動が9割を占めているからです。

私が学生生活で力を注いでいることは、ライフセービング活動です。中央大学の体育連盟に昇格して2年目のライフセービング部の副主将として活動しています。また、南伊豆ライフセービングクラブにも所属していて、夏休みの間は弓ヶ浜海水浴場とヒリゾ浜の監視活動をしています。なぜライフセービング活動を始めた



(上) オーストラリアでパトロールに参加

(下) オーストラリアの武者修行 Freshwater LSC メンバーとの練習後

のかという点と、理由は主に三つあります。まず一つ目は中学・高校での水泳部で培った泳力を活かせる点。二つ目は人命救助という社会貢献ができる点。三つ目は、大学から競技スポーツを始める人がほとんどのため、ゼロから挑戦できるという点です。ほかに、監視活動では共同生活をするようになるので、人間力を培うことができると、好奇心旺盛な私にとつては、あまりにも魅力が詰まっている活動だと感じました。そして気づ



ライフセービングで留学を果たした筆者

けば、ライフセービング活動に夢中になっていました。朝は江の島で練習し、放課後は多摩川で練習し、ライフセーバーとして、ひたすらトレーニングに打ち込む毎日でした。

ライフセービング競技で1位になる選手は、誰よりもライフセーバーとしての実力があることから「競技No.1はパトロールNo.1」という称号を得ることが出来ます。競技活動で伸ばしてきた実力が、監視活動という人命救助に活きてくる、なんと理にかなった活動だと思ひ、私はこの称号に憧れて夢中で練習に励みました。

海外留学のチャンスをつかむ

そんな情熱的に駆け抜けてきた毎日だったので、あるとき、ふと頭に

すべての魅力が詰まった活動、ライフセービング

はやかわ とうま
早川斗真

文学部人文社会科学科社会情報学専攻3年
私立佼成学園高校(東京都)出身

よぎったことがありました。「大学生活で自分がどうしてもしたいことはなんだろう?」私にとつて、それは海外留学に行くことでした。海外に行くことで、今までにない世界に足を踏み入れる、さまざまな価値観に触れることができます。自分自身の視野が広がれば、人生の可能性も広がるのではないかと考えたからです。「競技活動に支障が出るなら留学は行きたくない。ただ、大学生活で留学に行くことは、自分のなかでは譲れない」このような思いに葛藤しているとき、ある衝撃的な話を聞くことができました。それは、ライフセービング留学に行くということでした。具体的にいうと、ライフセービング活動の中心となるパトロール活動、また、実力を向上させるためにトレーニングにも参加する、いわば武者修行

といったような留学です。ライフセービング発祥の地であるオーストラリアに行くことで、ライフセーバーとしての救命技術を上げることが見込まれます。なぜなら、日本と比べるとオーストラリアの海は遥かに波も高く、周りの実力も桁違いだからです。成長すること間違いのないという環境が、オーストラリアにはありました。

この話を先輩から聞いて感化されたとき、最初に述べた「学外活動応援奨学金」の話聞くことができたのです。私は、松田教授にメールで相談した結果、「挑戦しようと思ったこと、とてもうれしく思います。がんばりましょう!」と、激励の応援メッセージをいただきました。なんとうれいことか、やる気がさらに芽生えて、松田教授と面談を繰り返し、活動計画書を作成させ、なんとか奨学金を獲得することができました。松田教授のお力添えがなければ、つかみ取ることができない奨学金でした。この場をお借りして改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

背中を押してくれた奨学金制度

このように、中央大学には率先した成長意欲のある学生を応援するプログ

ラムがたくさんあります。そして、学生の本気に、本気で向き合ってくれる先生方や職員の方々がいます。私のこのエピソードを聞いて少しでも興味をもった方は、ぜひ調べてみてください。法学部はやる気応援奨学金、経済学部にも自己推薦、また語学をがんばりたい人向けの奨学金制度など、さまざまな種類の奨学金があります。奨学金の選考準備を通して感じたことは、結果がどうであれ、挑戦すること

とに意味を見出せることです。入念な準備をすることができ、ライフセービング留学が楽しみで仕方ありませんでした。また、選考段階ではたくさんの方々に協力していただき、改めて多くの方々を支えられて生きていることを実感しました。4年間という限られた大学生生活のなかで、主体的に行動することからつながる学びの経験は一生ものだからこそ、自分にとっての魅力を見つけ出すことは大切だと思います。

私にとって大学生活の魅力は、ライフセービング活動です。中央大学に入学して出会えたこの活動、文学部に所属していたからこそ気づけた学外活動応援奨学金、まだまだ大学3年の未熟者ですが、おかげで幸せな3年間を過ごすことができました。ありがとうございます。今度ともよろしくお願

From the Faculty of Letters



文学部だより



ご挨拶

文学部事務室
にしむら かつや
西村 克也

ご父母の皆さま、初めまして。2020年8月1日付で文学部事務室に異動してまいりました、西村克也と申します。このたびは貴重な誌面をお借りして、ご挨拶させていただきます。

私はこれまで7年間、入学センター事務部入試課で全8学部の入学試験業務全般を担当するとともに、高校生を中心とした全国各地の皆さまへ向けた、入試広報の業務に幅広く携わっております。

さて、ご子女が受験生だったころのことを一度振り返ってみてください。きっと、大きな希望を胸に、中央大学を進学先として選ばれたことでしょう。そして、保護者の皆さまも本学に期待をお寄せいただき、ご子女の決心を後押

しされたことと思います。

そうした皆さまの“想い”を直接伺う機会に恵まれた入学センターでの業務経験は、文学部事務室に異動してからも貴重な財産として活かされています。異動に伴い、大学の魅力を“発信”するこれまでの立場から、今度は魅力を“創造”していく立場になりました。将来の夢に向かって研鑽する学生の姿を見ていると、このような学生のために働けることに対して、日々感謝と喜びを感じています。一方で、学生生活がなかなか思うようにならず、受験生のときに思い描いていた希望を見失っている方もいるかもしれません。そんな方はどうか一人で悩まず、文学部事務室、教員、共同研究室をいつでも頼ってみてください。文学部はクラス担任制やゼミ、共同研究室に代表されるきめ細やかな教育が特徴ですが、学生一人ひとりへのきめ細やかな支援も大切にしています。

末筆になりますが、ご父母の皆さまをはじめご関係の皆さまにとって、素敵な一年になりますことを祈っております。ご子女の実り多き学生生活のために、精一杯の支援をさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。